

たまい場つうしん 第1号

—大人も子どもも気軽に立ち寄ってお茶のみ話に花が咲く、そんな地域の公民館をめざして名づけました—

白梅分館最大のイベント、白梅まつりを振り返りました

今年の白梅まつりは、5月31日(土)と6月1日(日)に開催されました。サークル間の交流だけでなく、地域の方々との出会いを求めて、テーマを「出会いふれあい白梅で」と称して、まつりの場がさまざまな交流の場となることを目指しました。また、駐輪場、駐車場、会場整理などの役割も含めて、ようやく全サークル参加の夢が実現しました。

雨にたたられましたが、来場者数は二日間で1269人を数える賑やかなおまつりとなりました。



「白梅太極拳の会」と会場の皆さんの演舞の様

今年来られなかった方は
来年はぜひ見に来てください。
お待ちしております。

このおまつりは参加者にどのようにうつったのでしょうか？

実行委員長 野中勝さん(「弘梅会」)

委員長として何ができたのだろうかと考えている。当日は、具体的な仕事が無かったせいも余計そう感じる。全サークル参加の体制は今後も継続させたい。来館者とゆっくりおしゃべりすることができたのは休憩所としてテントを独立して設置したからだろう。この役を終えた今、公民館活動というものが少し見えてきたような気がする。

副実行委員長 前田美子さん(「オカリナひびき」)

「ここに来て生まれて初めて役らしい役を持った。おかげで裏方の事情が良く分かった。特に最終日の片付けは、机やイス、テントの返却をトラックで何往復もしているのを見て驚いた。ただ出演していただけの時は想像すらしなかった。多くの人のアドバイスに助けられた。今度は自分が助けたいという気持ち湧いた。

副実行委員長 森田芳伸さん(「熱闘会」)

新しい試みで「子どものためのペンダントづくり」をサークルで実施した。悪天候にもかかわらず、六十二名の参加があった。子どもの声が響くまつりは活気があって良い。これから子どもを呼ぶ工夫を続けたい。



参加者の声

松林分館利用者 吉岡勇(せん) (「けいけい」)
公運審委員 (「公運審委員」)

地元の人が公民館でつながっていて、地域に密着している本当のおまつりという印象を受けた。会場整理をしている人から、「自分達のサークルは出し物が無いからこの役を受け持っています。」との話を聞いて驚いた。全部のサークルが参加するのは珍しいのではな



いか？羨ましい限りである。もう一つ驚いたのは、小学生がたくさん来ていて楽しんでいること。子どもを楽しませるための工夫があり趣向を凝らしていることにも感激した。

「自身のだれでもなんでも展は？」

ポップコーンの販売と個人で篆刻の作品を出品する予定である。

本館利用者 清水特行(さん) (「福生ひゃっとう」)
連 (「連」)

とにかく驚いたのは、演示の会場づくりの光景を見たとき。三十人近い人たちが実に生き生きと楽しそうに仕事をしている。自分達のまつりを自分達で作るという意識を感じて羨ましいと思った。和気あいあいとした雰囲気から、理屈で成り立っているのではない古き良き地域性を感じる。

こんな例えがある。商店街に活気を取り戻そうとして道路を整備して広くした。結果的に車の往来が激し

くなったために、人がゆっくり歩いていられなくなりました。適度な「規模」が大切ということ。この白梅分館の規模は、ちょうど良いのだと思う。アプローチからロビー全体に「泥臭さ」も漂っているので気に入れるところも良い。

「自身の本館まつりは？」

ひょっとして踊りの披露の他に、ひょうたんの展示と看板づくりで参加した。三つの振りだけで踊れる「ひょっとして踊り」を福生に広めるのが夢。



耳寄りのお話

白梅まつりで自分のやりたいことに出会い、活動し始めた人(「耳寄りのお話」)

何かしたいという思いをずっと抱いていた。まつりで陶芸サークルの展示を見た。入りたいところが見つかったけれど募集しているかが分からなかった。後日、「見学したい。」と思い切って館に声をかけて橋渡しをしてもらい、現在もつ活動を始めている。丁寧に教えてもらってとても居心地が良い。良かった。

(熊川在住 Aさん)

☆どんなサークルが募集しているのか分かりにくいとお言葉を受けて只今募集中のサークルを別紙にてお知らせします。



職員の声

小山館長

今年初めて白梅まつりを経験しました。地域住民、学校、公民館利用者など多くの方の支えがあって「地域のまつり」として定着されて今日まで至っています。初日のあいにくの雨天にも関わらず昨年の入場者を上回ったことはまつりを盛り上げようとする皆さんの熱意やこれまでの職員の意気込みが感じられました。

四年目の職員小宮

出し物が無いサークルは不参加・・・という今までの状況を二年がかりで解消。今年は全サークルの参加が実現しました。「超爽ー」(北島康介オリンピック風)

新任の審判員手島

福生市も、公民館に働くのも、初めての手島です。着任最初のイベントが「白梅まつり」でした。お祭りの2日間は、白梅のサークルの方や地域の子どもたちがひっきりなしの大にぎわい。準備や後片付けも「こちでやっつくよー!」「手伝つよ。」「と、自然な流れで進んでいたことに驚きました。こつした裏舞台での人々の協力や奮闘がお祭りにぎわいを生み、白梅まつりは白梅分館のものではなく、参加した皆のものになっていくのだと思いました。



※関係者の皆さんご協力大変ありがとうございました。

職員の話

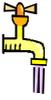
利用者の皆さんが気持ちよく会館に来られるよう朝一番に玄関、1階トイレ、ドア、窓ガラス、ロビーなどの掃除やコピー機、印刷機の拭き掃除、電源スイッチのON、空調機の稼働チェックを行っています。



外からも事務所の窓も拭くのです
特に玄関とトイレは重点的に！
これ、先輩からのお達し

シルバーさんの朝

前日に使用された電気、水道、ガスのメーターの点検記録をします。これは毎日点検することで部屋の使い方、機械的トラブルや水漏れなどを速やかに発見する大事な業務を担っています。また、部屋によっては朝一番で窓を開け空気を入れ替えを行っています。



学童クラブを併設する白梅会館（分館）は本館や松林分館と比べ、年末年始の休日を除きほとんど毎日のように使われていますので電気、ガス、水道の使用量も日数的に多くなっています。

何でもこなすシルバーさん

白梅会館入口の左側にある掲示板が長い間風雨にさらされ無残な姿になっていました。ご覧ください、この手際のよさ。本職も顔負けの技術で、あっという間に廃物の板を利用して新品同様に変えてしまいました。しかも真夏の暑い屋下りの出来事。白梅会館の前を通ることがありましたらこの記事のことを思い出して掲示板を見ていただけたら嬉しいです。



梅雨明け後、建物周囲の植え込みなどに夏草や、樹木の枝などが待っていたかのように勢いよく伸びています。でも、シルバーの方が日中の暑い最中でも剪定や草取り作業に専念するのでいつもきれいに保たれています。

ありがとうシルバーの皆さん！

子どもたちも集まる公民館！

学童クラブの子どもたちのほかに二小の子どもたちがよく遊びに来ます。ロビーではボードゲームやDSなどで楽しそうに遊び、外遊びでは夏の日差しの中、汗にまみれながらも元気いっぱいです。館の出入りのあいさつを忘れると職員やシルバーさんから注意を受けます。



きれいにみえるけど実は老朽化！？

白梅会館は築後28年が経過し、市内の公共施設の中でも特に古く、老朽化が進んでいます。日頃の維持管理でこれ以上の老朽化が進まないよう気をつけています。特に空調施設では小さなトラブルも多く発生し、利用者の皆様には大変ご迷惑をおかけしています。また、昨今の燃料費の高騰によって電気、ガスの使用の節約、地球温暖化防止には職員一同これからも努めていきますが、利用者の皆様にはより一層のご理解、ご協力をお願いします。



6月から、事務所の机の配置を変えました。今まではいつも館長が受付窓口から見えにくく、館長不在？のようで、利用者からは女性職員だけの「大奥？」のように見えていたようでしたが、今は館長「殿？」の顔も見えるようになりました。特に「殿」の顔が見たい方は気軽に声をかけてください。待っています。

こんなこともやっています！！

有料のコピー機や印刷機の使用
市指定のおむつ袋・ボランティア袋の無料配布
資源回収のステーション

白梅分館

主催講座の紹介です。

白梅分館にはたくさんの花や木があります。…でも、それだけではなく、裏のグラウンドにまわる「サツマイモ畑がー公民館に畑？よく晴れた日には「ゴザ」の上で麦の実も干されています。なんだか不思議な光景ですね。

実はこれ、白梅分館主催「福生ちいきの食育講座」の一部分なのです。



「そーっとね。」館長が先生です。

サツマイモ畑は、館に併設されている学童クラブ「たんぼぼ」の子どもたちと一緒に植えました。秋には収穫し、焼き芋にする予定です。これまでも学童の子どもたちとは、バケツ稲やもちつきなどの体験をしてきました。

麦は、6月に原ヶ谷戸での

「麦体験講座」のもの。麦は粉にする前に、カラカラに干さなくてはなりません。梅雨の合間を見て、職員とシルバ一さんが一緒になっての仕事をしました。

農作業は毎回「タバタで、融通のきかない部分がたくさんあります。たとえば麦も、講座だけではどうしても間に合わず、館へ持ち帰っての作業。「自然相手だからね」が、作業中のみんなの口癖。そうした実体験を通して、自然と人、人とのつながりを育んでいきます。

「地域密着」だけでなく、「土と密着」も、白梅分館の特徴になりつつあります。



麦はカラカラになるまで干します。

私のお話

地域の歴史①

住民の皆さんにお話を聞き、福生のいま・おかしをお伝えします。皆さんが暮らす福生はどんな所なのか。公民館の外に目を向けてみました。

第1回目は、白梅分館のある熊川に長年くらししている竹田政枝さん（76）のお話です。

竹田さんは昭和32年に、あきる野市（当時・秋川市）からお嫁にきました。ご実家は田んぼ農家で、大農家に嫁ぐことを親御さんは望んでいましたが、知り合いの紹介で、サラリーマンの旦那さんとお見合いをし、熊川にやってきました。新婚時代のお家は、60坪の土地に14坪という、竹田さん曰く「マッチ箱」のように小さいものでしたが、自分たちの家が持てる幸せを感じたそうです。現在のこの辺りは、家やマンションがびっしりと立ち並んでい

ますが、当時は竹田さんのご近所は道路を挟んで5、6軒民家があるだけ。あとは麦畑が広がり、拜島駅まで見渡せました。立川の会社に通う旦那さんを家から駅まで見送りができたほどです。これが、竹田さんの毎朝の日課でした。



しかし、4、5年の間に続々と家が建ち並び、駅へも遠くなっていきました。また、奥多摩街道沿いのデニース（ファミリーストラン）脇に入り、南田園の団地の辺りまで、全て田んぼでした。春になるとレンゲの花が咲き、放し飼いの牛がそれを食べます。



写真提供：竹田政枝さん

それにもかかわらず、隣接する多摩川はたびたび洪水をおこし、今のようになりかた堤防のない土手を軽々と水がとび越えてきました。当時の風景を語りながら、竹田さんはつぶやきました。「こんな景色だったのも、お嫁に来てほんの数年よ。その後はおつという間に変わっていったね、今の景色になったの。」

こうした風景をバックに、福生での生活が始まりました。そんな中どんな仕事をした、どんな人との出会いがあったのでしょうか。―続く―

編集後記

近くにあるのにあまり知られていない公民館をもっと知っていただこうと、いろいろな角度からご紹介しました。ぜひ一度お出かけください。お待ちしております。

